

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷三十二第

行發日一月十年五十五大

論叢

「中庸」に見はれたる經濟思想教授 法學博士 田島 錦治

經濟議會の二種と獨逸經濟委員會教授 法學士 森口 繁治

不在者課稅論教授 法學博士 神戸 正雄

流通過程に於ける酒稅の轉嫁助教授 法學士 汐見 三郎

輸出信用保險について教授 經濟學博士 小島昌太郎

現今に於ける爲替相場の變動橫濱正金銀行 法學士 水津 彌吉

我國財政の變遷教授 經濟學博士 本庄榮治郎

琉球の慶長役以前教授 法學博士 山本美越乃

資本利子稅の客體に就て和歌山高等商業學校 教授 經濟學士 小山田 小七

徵兵制度反對宣言に就て助教授 法學士 作田 莊一

實際賃銀と其測定講師 經濟學士 蛭川 虎三

法 令

續大勞役扶助規則中改正・造幣局合金製造規則・畜產物販賣鞋旋及受托販賣獎勵規則・水産増殖獎

勵規則

勵規則

勵規則

勵規則

經濟論叢

第二十三卷 第四號

(通卷第百零六號)

大正十五年十月發行

論叢

「中庸」に見はれたる經濟思想

田島錦治

一 緒論

「中庸」といふ書は孔子の孫子思の作れるものなるは「史記」孔子世家に見ゆ。蓋し子思は孔子の高弟曾子の教を受け、此書を著はして其綱要を傳へ、孟子更に之を受けて「孟子」七篇を著はしたり。「中庸」は朱子が其著はせる「中庸章句」の序に詳論せる如く道統の傳として支那諸經籍の中重要な位置を占む。此書はもと「大學」と共に各々「禮記」の一篇を成し、鄭玄の古註あり。宋に至り、「大學」「論語」「孟子」と共に四書と稱せられ、朱子之が章句を作り。同時に「中庸輯略」及び

「中庸或問」の二書を公にせり。

余は曩に(本誌第二十二卷第三號)「大學」に見はれたる經濟思想と題する小論文を草して大方の教を乞ひたるが、今又稿をつぎて茲に「中庸」に見はれたる經濟思想に就き鄙見を述べんと欲す。題して經濟思想といふと雖も、必ずしも正確に今の學者の謂はゆるエコノミクスに當らざる節も多々有るべく、又「中庸」に包含せらるゝ重要な章節及び其趣旨にして、此小論文の論及せざる處も亦尠なからざるべし。然れども余が茲に論せんと欲するは、「中庸」が輒近歐洲の學者特に經濟學者が久しく論争し、今尙ほ論争しつゝある或重要な原理原則に就て夙に確乎たる斷定を下し、正當たる方針を示したるの點に在るなり。

二 自然法則及び相對原理

前述歐洲學者の論争する重要な原理原則とは、他なし、其一は自然法則(natural law)にして、其二は相對原理(principle of relativity)なり。自然法則を説く人々の中にも、其所見を一にせず。法律學者と經濟學者との間に多少其趣を異にし、經濟學者に就て見るも、ケネー氏等自然法則學派の謂ゆる自然の秩序(*l'ordre naturel*)はアダム・スミス氏のそれと同じからず。前者は自然の秩序を以て吾人の履行すべき道なりと思考す(*c'est un ordre à réaliser*)。而して後者は自然秩序は

之を自由に放任すれば、それ自身に行はるゝものなりと思考す (un ordre qui se réalise)。シャーン・バプチスト・セー氏は更にスミス氏の説を要約してスミス氏の未だ用ひざりし富を支配する法則なる語を用ふるに至れり (des lois qui régissent la richesses)。リカード氏の抽象的説明及び之に繼ぎて起れるマンチェスター學派の自由貿易論は一國一時代に適當なるべく思はるゝ理論又は政策を以て、何れの時何れの國にも適用せらるべきものゝ如く高調したり。斯の如きは經濟上の自然法則又は一般原理を極端に擴充し、又は之を誤解したるものにして、果して此説の反動は起りたり。獨逸の學者フリードリッヒ・リスト (Friedrich List) が千八百四十一年に著したる Das nationale System der politischen Oekonomie は、前記自由貿易論者の世界共通學理 (cosmopolitan theories) に反對して、各國各時代に執るべき特別の經濟政策あることを論じて、當時の獨逸に向て幼稚なる工業保護の緊要を絶叫したるものなり。之に次ぎて獨逸に興りたる歴史派經濟學者即ちブルノ・ヒルデブランド、ウイルヘルム・ロツシエル、カール・クニース三氏の如きは、共に經濟上の自然法則若くは一般原理を主張する從來の學説と反對の研究方法を執り、統計及び歴史に依りて、各國各時代に發達せる經濟的諸事實を蒐集調査し、而る後之を歸納して、各國各時代に於ける特殊の經濟の性質を一々闡明せんと努力したり。ロツシエル氏が千八百五十四年に第一版を公にしたる Grundlagen der Nationalökonomie は最も善く氏の研究方法を示す所の書なれども、

之より先千八百四十三年に氏の著はしたる小冊子 Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode の序文は既に此意見を明示せり。氏は曰く「吾人の目的は諸國民が經濟上の事柄に就て希望し又は感じたる所のもの、彼等が行なひ及び爲し遂げたる諸件、彼等がそれ等の諸件を行なひ及び爲し遂げたる諸理由を記述するに在り」也。

之を要するに歴史派經濟學者は、概して自然法則又は一般法則を否認し、各國各時代に特殊の經濟あること、即ち相對理論を主張するが如し。

然れども、此考は亦未だ正鵠を得ざるに似たり。伊太利の經濟學者コッサ氏は曰く『ロッシエル氏は小兒に向ての食物は大人に向ての食物に非ずと言ひたれども、メッセダグリア (Messedaglia 伊太利の經濟學者) は之に答へて小兒も大人も共に或種類の食物を要求し、食物の營養機能の法則は生理學の教ふる所なりと言ひたり』云 (Luigi Cossa, An introduction to the study of political economy. 英譯 London, 1893. p. 85)

メッセダグリア氏の此批評は先づ余の意を獲、蓋し自然法則即ち一般原理と相對理論とは二者相平行し得るものにして、必ずしも互に矛盾衝突するものに非ず。例へば、衣食住は人生に必要なりといふことは、自然法則なるべし。而して夏は褌、冬は裘、或人民は穴居し、他は宮居し、或民族は重に肉食し、他は重に穀食すといふが如き事に就ての説明は相對理論に屬すべきなり。

又例へば人倫五常の道は古今に通ずる自然法則なるべし。然れども禮儀法令は固より時世の變遷に伴ふ損益改革するの要あり。是れ即ち相對理論なり。畏くも 明治天皇の下し賜ひたる教育勅語は最も崇高なる道德上の自然法則即ち一般原理を闡明せられたるものにして、「此道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所之を古今に通じて謬らす之を中外に施こして悖らす」の御詞を拜讀すれば明白なり。夫れ斯の如く倫理又は教育には自然法則即ち一般原理ありと雖ども、倫理に關する諸禮式又は教育に關する諸制度は固より時世に伴ふ變革する所なかるべからず。されば冠婚葬祭の禮儀は古今其揆を一にせず。大小の學校各種専門學校實業教育圖書館の諸制度諸設備にして、古に無くして今有り、又は今の全く古と異なる者多々有り。是れ即ち相對原理に由るなり。夫れ斯の如く自然法則と相對原理とは相平行し、決して互に矛盾衝突するものに非ず。而して此理は近世歐洲の學者の熟知せざりし所又は誤解せる所にして、或者は自然法則を主張し、他の者は相對原理を高調し、互に辯難駁撃したるは前述の如し。然るに東洋の學者の中上古より斯の如き偏見に陷ゐらずして、能く中正の説を持したる者尠なからず。而して「中庸」の書は其最も顯著なるものなり。是れ余が本論を草したる所以なり。

三 「中庸」の教ふる自然法則

第一 自然法則に關する「中庸」の説は如何にといふに、中庸といふことが即ち自然法則なり。

程子曰く、不偏を中といひ、不易を庸といふ。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なりと。

天下の正道又は天下の定理といふ語と自然法則又は一般法則といふ語は、語は異なれども意は一なり。謂ゆる之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるものなり。「中庸」の篇首に

「天の命を性と謂ひ、性に率ふを道と謂ひ、道を修むるを教と謂ふ」とあり。此性道教の三は皆其本を天に發して、實は人に離れぬものなり。故に次に「道なる者は須臾も離る可からず。離るべきは道に非ず。是故に君子は其睹ざる所に戒愼し、其聞かざる所に恐懼す。隠れたるより見はるゝは莫く、微かなるより顯れたるは莫し。故に君子は其獨を愼む」の文あり。又次に「喜怒哀樂の未だ發せざるを中と謂ひ、發して皆節に中るを和と謂ふ。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地は位し、萬物は育す」の文あり。

以上を朱子は第一章と爲し、曰く「右第一章は子思傳ふる所の意を述べて言を立てり。首めには道の本原天に出で、易ふ可からず、其實體己に備りて離る可からざるを明にし、次には存養省察の要を言ひ、終りには聖神功化の極を言へり……楊氏の謂ゆる一篇の體要とは是なり。其下十章は蓋し子思夫子の言を引きて此章の義を終へぬ」と。

右第一章は「中庸」が自然法則を教ふるものなるは明白なり。天下の大本といひ、天下の達道と

いふは亦其明證なり。今少しく卑見を加へて上掲の文を説明せん。

天の命を性といふは、例へば水の潤下、火の炎上、土地の草木を生じ、禽獸の蕃殖するは、物の性にして天より稟けたるものなり。仁義禮智信は萬物の靈たる人の性にして、同じく天より稟けたるものなり。故に曰く天の命を性といふと。

性に率ふを道といふは、性の自然に従ひて行ふべき方向あるをいふ。例へば水の低きに就く性に従ひて舟筏を行り、田畝に灌漑し、風の性に従ひて帆を張り、風車を動かす、火の炎上の性に従ひて食物を煮焼し、鋼鐵を鍛錬し、土性に従ひて菜穀を種え、又は牛羊を牧するが如きは、物の性に率ふの道なり。而して君仁に臣忠に、父慈に子孝に、夫婦和睦し、兄弟親愛し、朋友信頼するは、人の性に率ふの道なり。

道を修むるを教といふは、又物の性に率ふ道を修むる教と、人の性に率ふ道を修むる教との二つに分けて見るを便とす。例へば探鋤治金耕耘牧畜飲食の調理舟車の利用等を教ふるは前者に屬し、倫理經濟法律等を教ふるは後者に屬す。而して「中庸」の謂ゆる道を修むるの教は主として後者に就ていふと雖も、前者も亦自から其裡に含蓄せらるゝなり。されば後文に「人飲食せざること無し、能く味を知る鮮し」といふは飲食にも亦其道あり其教あるを謂ふなるべし。又「君子の道は費にして隱なり」の文あり。費とは用の廣きをいひ、隱とは體の微なるをいふ。其用や廣し、

故に愚夫愚婦も與り知るを得。其體や微なり、故に聖人と雖ども亦知らざる所、行ふ能はざる所あるなり(中庸章句第十二章)。孔子が其門人樊遲が稼を學ばんことを請へるに答へて、吾老農に如かずと曰へる亦以て見るべきなり。

『道は須臾も離る可からず』以下は蓋し道を修むるの要を説く。朱子曰く「道者日用事物當に行ふべきの理、皆性の徳にして心に具はり、物として有らざるなく、時として然らざるなし、須臾も離るべからざる所以なり。若し其れ離る可くは則ち豈性に率ふの謂ならむや。是を以て君子の心常に敬畏を存して、見聞せずと雖も亦敢て忽せにせず。天理の本来を存して須臾の頃てんげに離れしめざる所以なり」と。此解釋甚だ宜し。然れども其下文『喜怒哀樂の未だ發せざるを中と謂ふ』を解釋して『喜怒哀樂は情なり。其未だ發せざるは則ち性なり。偏倚する所なし、故に之を中と謂ふ』と爲せるは、余の多年意に滿たざる所。性は果して偏倚するなきを得るや。孟子は人の性は善なりと曰へるは蓋し大體に就て言ふ。孔子は性相近しといひ、又上智と下愚とは移らずと曰へり。故に余思ふに聖人に非ざる限りは性固より偏倚する所あり、故に發して情となるに迨びて益々正鵠を失するに至るなり。朱子の言の如くんば、愚者と雖も、其喜怒哀樂の情の未だ發せざる時、即其性なる者は偏倚する所なく、而して之を中と謂ひ、此中を天下の大本と謂ふことゝなる。思ふに前提既に妥當ならざるに似たり、故に結論亦面白からざるものとなるなり。敢て鄙見

を述べて大方の教を乞ふこと次の如し。

此「喜怒哀樂の未だ發せざるを中と謂ふ」の文は前文「君子は其睹ざる所に戒慎し」云々より「君子は其獨を慎む」に至る數句と合せて見るを要す。君子は其睹ざる所に戒慎し、其聞かざる所に恐懼し、其獨りを慎むに於て、茲に喜怒哀樂の未だ發せざるの中を得るなり。他人又は外物と接觸し、即ち睹る所あり、又聞く所ありて、喜ぶべきに喜び怒るべきに怒り、哀しむべきに哀しみ、樂しむべきに樂しみ、而かも其度に適ひたる時は、茲に發して皆節に中るの和を得るなり。斯の如き中こそ天下の大本なれ、又斯の如き和こそ天下の達道なれ。斯の如き中和の極致は天地も正位を保ちて、萬物は化育す。蓋し天地萬物本と吾が一體なれば吾にして中和の道に合すれば、之を天地萬物に擴充するを得。故に下文に曰く「君子の道は端を夫婦に造す。其至れるに及んでや天地は察はる」(第十二章)と。又曰く「唯天下の至誠は能く其性を盡すと爲す。能く其性を盡せば則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡せば則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡せば則ち以て天地の化を賛く可し。以て天地の化育を賛く可くんば則ち以て天地と參はるべし」と(第二十二章)。又曰く「大なるかな聖人の道、洋々乎として萬物を發育し、峻く天に極まる」と(第十七章)。

前掲第一章に於て子思は中和を説き、第二章乃至第十一章に於て九回中庸の語を反覆す。而し

て單に中の字を用ひたる例は、第二章に「君子にして時に中す」の文、第六章に孔子の舜を頌するの語「舜好んで問ひ、邇言を察し、惡を隱して善を揚げ、其兩端を執り、其中を民に用ゆ」の文あり。又中の字を別にして單に庸の字を用ひたる例は、第十三章に孔子の語「庸徳を行ひ、庸言を謹み、足らざる所あらば敢て勉めずんばあらず。餘りあらば敢て盡さず」の文あり。此の如く或は中和といひ、或は中といひ、又は庸徳庸言といふも、皆中庸と同意義なるは前後の文に照して明白なり。

第二章に曰く「仲尼曰く、君子は中庸す、小人は中庸に反す。君子の中庸するや、君子にして時に中す。小人の中庸や(王庸の本には小人の中庸に反するやに作る)小人にして忌み憚る所なし」第三章に曰く「子曰く、中庸はそれ至れるかな。民能くする鮮きこと久し」第四章に曰く「子曰く、道の行はれざるこことや、我之を知る。知者は之に過ぎ、愚者は及ばざるなり。道の明かならざるこことや、我之を知る。賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざるなり。人飲食せざるなし、能く味を知る鮮し」以上の文を熟讀玩味すれば中庸の道の何物たるは之を推知し得べきなり。蓋し中庸の道は飲食の如く、吾人平常知り且行ふ所にして過又は不及なきことを謂ふ。君子にして常に存養省察の功夫を積まば、能く時に隨て中に處り、過又は不及なきを得れども、小人は欲を肆まにし、妄りに行ひ、忌み憚る所なくして、たとへ彼は自から以て是なりとするも、實は中庸に反す。此第二章の君子小

人の區別は第四章の知愚賢不肖の區別と同じからず。前者は存養省察の功夫を積む者と之を蔑如する者によりての區別にして、後者は生れつきの差別なり。蓋し人は生れ乍らにして知愚賢不肖の差あり、知者賢者は過ぎ、愚者不肖者は及ばず、是れ中庸の道の明かならず、又行はれざる所以なり。

以上經說したる所に由り「中庸」の書の教ふ所は、自然法則即ち吾人の知り且行ふべき一般原理なることは明かなり。而して子思は第十六章に於て始めて更に誠の字を出し來る。曰く、「誠の揜ふ可からざる此の如きか」而して第二十章に於て「誠者天の道なり。之を誠にする者人の道なり。誠者勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中る、聖人なり。之を誠にする者善を擇んで固く之を執る者なり云々」第二十一章に「誠なるに自りて明なる之を性のまゝと謂ひ、明なるに自りて誠なる之を教のまゝと謂ふ。誠なれば則ち明なり。明なれば則ち誠なり」の文あり。第十二章「唯天下の至誠云々」の文は既に前に述べたり。以下諸章誠の文字を反覆す。第二十五章に曰く「誠者自ら成るなり、而して道は自ら道くなり。誠者物の終始、誠ならざれば物無し。是故に君子は之を誠にするを貴しと爲す。誠者自ら己を成すのみに非ず、物を成す所以なり。己を成すは仁なり、物を成すは知なり、性の徳なり、内外を合するの道なり。故に時に之を措て宜しきなり」

誠とは、朱子之を解して眞實無妄となせり。眞實有りのまゝにて何等人の作爲を待たずして存
在する本來の理を言ふ。蓋し英語の truth 佛語の verité 獨語 Wahrheit に當る。例へば晝夜の
別、春夏秋冬の推移、星辰の運行、草木禽獸の生育の如きを謂ふ。聖人は勉めずして中り、思は
ずして得、從容として道に中る。即ち其徳天道と合すれども、聖人より以下は然るを得ず、故に
善を擇んで固く執るの功夫を積む。是れ之を誠にする者にして、即ち人の道なり。而して善を擇
んで固く執るの功夫に就ては下文に『博く之を學び、審かに之を問ひ、慎で之を思ひ、明かに之
を辨へ、篤く之を行ふ』の諸目を擧ぐ。實に親切丁寧と謂ふべし。軌近學者の眞理の探求豈之に
加ふべきものあらんや。

尙は前掲の諸文に就ては、別に鄙見の加ふべきもの無きに由り、朱註に譲りて、茲に一々解説
せず。

四 「中庸」の教ふる相對原理

第二 相對原理に關する「中庸」の説は如何にといふに、第二章「君子の中庸するや、君子にし
て時に中す」の文先づ最も簡明に此原理を示せり。而して其詳細は第十四章の文なり、曰く「君
子は其位に素して行ふ、其外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行

ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ふ。君子入るとして自得せざる無し。上位に在りて下を陵がす、下位に在りて上を援がす、己を正ふして人に求めざれば則ち怨なし。上は天を怨みず、下は人を尤めず、故に君子は易きに居て以て命を俟つ。小人は險きを行ひて以て幸を徼む』と。謂ゆる其位に素して行ふとは、朱註「素は猶ほ見在の如し、言ふところは君子但見在居る所の位に因て其當に爲すべき所を爲し、其外を慕ふの心無し」と解す。此解は當れり。君子は時に中す、即ち富貴貧賤夷狄患難等其遭遇する時と處とに應じて適宜なる動靜を爲し、何れの場合に處しても自得せずといふこと無し。論語に『子貢問ふて曰く、貧にして諂ふなく、富んで驕る無きは如何。子曰く可なり、未だ貧にして樂しみ、富んで禮を好む者に若かず』學而第一のこの文あり。富んで禮を好むは、富貴に素して富貴に行ふ者なり。貧にして樂しむは、貧賤に素して貧賤に行ふ者なり。又論語に『子曰く泰伯は其れ至徳と謂ふ可し、三たび天下を以て讓り、民得て稱する無し』の文あり。泰伯は周大王の長子、位を末弟昌に讓り以て父の志を成さんと欲し、次弟仲雍と逃れて荊蠻に之き、其俗に従ひて文身斷髮し、竟に返らず、吳國の祖となれり。泰伯の如きは夷狄に素して夷狄に行ふ者と謂ふべきなり。史記に云ふ『舜の父頑、母嚚、弟傲、能く和するに孝を以てし、烝々として治め、姦に至らず』と。舜の如きは患難に素して患難に行ふ者と謂ふべきなり。

上位に在りて下を陵ぐ者は、即ち富んで驕る者なり。下位に在りて上を援く者は、即ち貧くして諂ふ者なり。斯の如き輩は即ち險きを行きて幸を徼むるの小人なり。之に反して君子は上位に在りて下を陵がず、下位に在りて上を援かず、則ち上天を怨みず、下人を尤めず、斯の如き人は易きに居て以て命を俟つ者なり。此第十四章の文を熟讀玩味すれば「中庸」が相對原理を教ふるものなるは明白なり。

第二十八章に曰く『天子に非ざれば禮を議せず、度を制せず、文を考へず。……子曰く、吾夏の禮を説く、杞徵するに足らず。吾般の禮を學ぶ、宋の存する有り。吾周の禮を學ぶ、今之を用ゆ、吾は周に従はん』朱註云ふ『杞は夏の後、徵は證なり。宋は般の後。三代の禮孔子皆嘗て之を學んで、能く其意を言へり。但夏の禮は既に考證すべからず。般の禮は存すと雖も、又當世の法に非ず。惟周の禮は乃ち時王之制。今日の用る所。孔子既に位を得ざれば則ち周に従ふのみ』と。此章亦時世に因り、國に由り、又は人の地位に由りて適宜に爲す所あり、又は爲さざる所あるべきの相對原理を示すものに非ずや。

論語に『顔淵邦を爲るを問ふ。子曰く。夏の時を行ひ、般の輅に乗り、周の冕を服し、樂は則ち韶舞し、鄭聲を放ち、佞人を遠けん。鄭聲は淫に、佞人は危し』と(衛靈公第十五)。孔子が時世に従ひ宜しきを制せんとするの意亦以て觀るべし。

以上稷述せる所を約言すれば、「中庸」は古今に通じて謬らず、中外に施こして戻らざる一般原理即ち自然法則を教ふると同時に、時代に因り國に因り又は人に因りて損益變改すべき相對原理を教ふる寶典なるを知るなり。

五 餘 論

本論文に於ては、「中庸」が自然法則と相對原理とを教ふるものなるを詳述したるが、尙附言すべきは、「中庸」は輒近歐洲學者の盛に唱ふる所の連帶原理 (solidarity) を夙に道破せることはなり。而かも其連帶原理は經濟學者バスタヤ (Bastiat) が分業より考へ附き、又は政治家ブルジョワ (Léon Bourgeois) が私法上の准契約より推論せる如き、其他細菌學、社會學等より蒐集せる材料に因りて構成せる至て雜駁なるものと異なり、東洋哲學に特有なる玄妙高大なる大理想を成すものなり。即ち「中庸」は人と天地萬物との間にソリダリチーあるを教ふ。天道と人道との間にソリダリチーあるを論じ、鬼神と人との間にソリダリチーあるを説く。前世と後代との間にソリダリチーあるを示す。而して此等のソリダリチーの脉管に流るゝ血液は即ち誠なりと謂ふなり。『中和を致せば、天地位し、萬物育す』といひ (第一章)、『唯天下の至誠は能く其の性を盡す……能く物の性を盡せば則ち以て天地の化育を賛くべし。天地の化育を賛くべくんば則ち以て天地と

參はる可し」といふ(第二十二章)が如きは、則ち人と天地萬物との間にソリダリチーあることを教ふるものに非ずや。「誠者天の道なり、之を誠にするは人の道なり」といひ(第二十章)、「大なる哉聖人の道、洋々乎として萬物を發育し、峻く天に極まる」(第二十七章)といふが如きは、則ち天道と人道との間にソリダリチーあるを論ずるものに非ずや。「鬼神の徳たる其れ盛なるかな。之を視て見へず、之を聽て聞へず、物に體して遺すべからず。天下の人をして齊明盛服して以て祭祀を承けしめ、洋々乎として其上に在すが如く、其左右に在すが如し。……夫れ微の顯はれ、誠の揜ふ可からざる此の如きか」(第十六章)といひ、「其位を踏み、其禮を行ひ、其樂を奏し、其尊べる所を敬し、其親める所を愛し、死に事ふること生に事ふるが如く、亡に事ふること存に事ふるが如く、孝の至りなり云々」(第五十章)といふが如きは、則ち鬼神と人との間にソリダリチーあるを示すものに非ずや。前世と後代との間のソリダリチーに就ては、第三十章「仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章す」の二語之を明示す。其他「子曰く憂なき者はそれ惟文王が、王季を以て父と爲し、武王を以て子と爲す。父之を作し、子之を述べり云々」(第十八章)。又「子曰く武王周公はそれ達孝なるかな。夫れ孝者善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述ぶる者なり云々」(第十九章)とあるが如きは、亦前世と後代とのソリダリチーを示すものなり。

以上分説せる各種のソリダリチーは又合集して一のソリダリチーを成すべきものにして、而し

て之を一貫する理は誠なり。故に曰く「誠者物の終始、誠ならざれば物なし」と。又曰く「誠者自ら己を成すのみに非ず物を成す所以なり」と(第二十五章)。又曰く「故に至誠は息むことなし、息まざれば則ち久し、久しければ則ち微あり、微あれば則ち悠遠なり、悠遠なれば則ち博厚なり、博厚なれば則ち高明なり。博厚は物を載する所以なり、高明は物を覆ふ所以なり、悠久は物を成す所以なり。博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆まがなし。此の如き者は、見まさずして章かに、動かすして變り、爲すことなくして成る。天地の道は一言にして盡すべし、其物たるや貳ならざれば則ち其物を生ずること測られず。天地の道は博なり、厚なり、高なり、明なり、悠なり、久なり云々」と(第二十六章)。又曰く「唯天下の至誠は能く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知ると爲す」と(第三十二章)。謂ゆる天下の至誠とは聖人にして、其德極めて眞實にして無妄なるは天地と同じきが故に、其德澤は廣大永遠に天下後世に及ぶなり。博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆り無しとは即ち是なり。「中庸」の説く所のソリダリチーは斯の如し。若し之を以て軌近の社會連帶論者が往々社會の劣者、即ち白痴癡癡虚弱者病人犯罪者貧乏人等を以て社會の扶助を受くべき權利ある債權者と爲し、之に反して社會の優者、即ち健康又は富裕なる人等を以て社會に支拂の義務ある債務者と爲すの說に比較すれば、余は後說の中和の旨に背き、中庸の道に合せざるの危険あるを見る。何となれば、若し社會の劣者が社會扶助を受くることを彼等の權利なりと思考し主張し、而して社會の優者が寄附する所の慈善は之を慈善と

して受くるを屑しとせず、總て納稅其他の方法に由り國家の手をして、彼等の債務として強制的に出資せしめんとするに於ては、社會の平和は爲めに脅かされ、階級鬭争をして益々激烈ならしむる虞あればなり。

軌近の社會連帶論者の說の中には取るべき點固より尠なからずと雖も、其權利思想を根柢とするより危險なる結果を生ずる虞あること前述の如し。而して尙之より危險なるはマルクス派社會主義又は之より派生したるサンヂカリズム又はボルシエヴィズムなり。彼等は社會階級鬭争を高調し鼓舞し激發するを努む。彼等は社會人民の一部即ち勞働者又は無産者のみのソリダリチー又は團結を以て、社會人民の他の部分を撲滅せんとするものにして、若しソリダリチーと謂ひ得べくんば、至て偏倚せるソリダリチーなり。實は圓滿中和なる眞のソリダリチーを破壊する主義なり。子思は孔子の言を擧げて曰く「隠れたるを素（當に素に）（作るべし）め、怪を行ふこと、後世述ぶるあらんも、吾は之を爲さず」と（第十一章）。子思が「中庸」を作れる微志亦以て見るべし。孟子子思の教を受け（蓋し子思の弟子よ（リ）再傳せるならむ）、中庸の道を傳へ、極力揚朱墨翟の邪説を排斥したり。揚子の自我説は極端なる個人主義にしてアナキズムに近く、墨子の兼愛論は社會主義に似たり。共に中庸の道に合せず。宜なるかな孟子の之を排斥したるや。今や揚墨よりは一層極端過激なる思想が或はマルクス研究の口實の下に宣傳せられ、或は社會連帶の假托を以て鼓舞せらる。隠れたるを索め怪を行ふ者の多き蓋し未だ今日より甚きはあらず。是れ余が本論を草して大方に問はんとするの理由の一なり。